
或る犬の生涯

山田 潤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

或る犬の生涯

【Nコード】

N9468X

【作者名】

山田 潤

【あらすじ】

或る家庭犬の生涯です。犬の視点で書いてみました。ペットの幸福とは一体何なのか、彼等の目に人間の行いはどう映っているのか、殆ど筆者の思い入れの物語です。

犬、かくも語りき

初めに断っておきますが、これは僕があなた方人間のいうところの五歳の意識で書いています。

幼少期に確たる自我もなければ、あなた方人間に意志を伝える術さえ持っていないからです。

従って、おぼろげな記憶を辿ったものであったり、主人の思い入れによる記述になったりもします。

文体が堅いのは、これまた人間がいうところの文系の主人に仕えたことによるものです。アップロードも当然主人に依存しています。

僕がキーボードを扱えば良いのですが、この前足の形状ではとても無理です。主人の肉体を借りて書きあげて行こうと思います。

先ずは自己紹介を。僕はゴールデンレトリバーという食肉目イヌ科の哺乳類です。血統書に記された本名はアンディ・スカイハイ・JH・JPと長つたらしいのですが、主人は僕をイッポと名付けて呼んでいました。そして、冒頭に述べた五歳などといった年齢を認識するものではありません。暗い時間と明るい時間を千二百回ほど過ごしてはいますが。

だから、犬の年齢は人間の幾つに相当するなどといった乱暴な換算は無意味であるご理解下さい。そしてストーリーに過度の期待をもたれることなどないよう、お願いします。大きな変化のない暮らしをこよなく愛する僕達です。散歩に連れ出してもらう、友人（勿論、犬です）と遊ぶ、食事をする（餌と呼ばれる類の物ではないものを主人は供してくれました）、排尿、排便をする。ストレス解消のために走り回る。そんな日常を書いた所で、お読みいただくあなた方の興味をそることなどないであろうと思うのです。

また、誤字・脱字、稚拙な文章、さらには整合性の不一致についても、予めお詫びしておきます。ですがそれは僕のせいではなく、

代筆をする主人の能力が及ばなかったのだ、と言いつを添えて。

僕が産まれたのは愛知県春日井市というところにある動物病院です。母はサクラと呼ばれていました。母の御主人は医療関係にお勤めになる大町さんという温和な人でした。明るい奥さんと元気なお子さん達、猫も数匹一緒に暮らしていました。

そもそも母が僕達を産むことになったのは、人に譲るためだったと聞いてます。無体な話です。父親の名前も血統書には書いてありましたが、見たこともなければ育ててもらった恩義もないので省略します。

六頭兄弟で唯一オスであった僕は、岐阜というところに住んでいた主人にもらわれて行くことになりました。偶然ですが、その主人の名前も母と同じ、佐倉さくらでした。彼は書物で　メスの方が飼いやすい　と、いった情報を仕入れ、妹か姉を譲り受けるつもりだったらしいのですが、大町氏の「オスは尻尾をピンと立てて歩くんです、格好いいですよ」との言葉に、心変わりをされたようでした。ただ後に述べる理由で僕は尻尾を上げることなく歩き、主人を落胆させました。

余談ですが、佐倉氏はよく言ったものです。「愛情を伴わない性行為は無意味だ」と。だとすれば僕の出生は無意味なものだということになります。しかし世の多くの犬がこんな風に産まれてくるのです。人間の価値観で計られても困るというものです。

言い忘れましたが、僕は世間一般のゴールデン・レトリバーと呼ばれる連中に比べてかなり色白です。正確には体毛が白いのです。そして友人だったジョンも僕同様に白かったように記憶しています。父親がイギリス系だからという理由でしたが、本当の所はよく分かりません。

夜目にも所在が分かりやすい以外は、あまり嬉しいことではありませんでした。汚れが目立ち、その都度あまり好きではないシャワーを浴びせられたのですから。人間にとってよい香りのシャンプー

ーであつても僕達には迷惑でしかありません。犬のアイデンティイはそれぞれ特有の匂いによるものなのですから。人間であるあなた方には理解出来ないかも知ませんが、僕達が初対面の相手と肛門付近（臭腺）を嗅ぎ合うのは、それが理由なのです。

僕達、犬の視力及び視覚的認識力というものは、あなた方人間のそれに及びません。そのため、優れた嗅覚と聴覚で五感を補つていきます。僕がシャンプーされた途端に体に泥や埃を纏おうとしたのは、アイデンティイの崩壊を恐れた、言うなれば自己防衛本能に基づく行為だったのです。佐倉氏は『せっかく、キレイにやってやったの』と嘆いたものですが、本能なのですから仕方ありません。

人間である、あなた方の世界でもよく聞きますよね。【自分探し】という言葉。よく言えば感受性が豊かなのでしょね。ですが悪く言えば被害者意識が強すぎる。或いは自己への過大評価が原因なのではないですか？ 機会があれば、ご自身を見つめ直してみられるといいでしょう。

幸い、我々犬はあなた方ほど頻繁に自分自身を見失うことはありません。

古の文豪の小説に、猫が語る手法をとられたものがあつたと聞きますが、それを真似た訳ではありません。佐倉氏の友人の勧めでこつなつたのです。退屈しのぎになれば、と思つて書いておりますが退屈を助長させてしまう恐れもあります。繰り返し言っておきますよ。

犬の語る物語などに過度の期待はしないで下さい。

媚びる犬

佐倉氏の家に連れてこられて僕は車という鉄の塊の下に潜り込んでしまいました。初めての場所で、初めての人々に囲まれた訳です。恥ずかしさのあまり車の下に潜り込んだことは説明するまでもないでしょう。

成長するに連れ、誰にでもすり寄って行く凶々しさを発揮するようになる僕でしたが、幼い頃には、こんな奥ゆかしさもあつたのです。そして、それはあなた方人間も同じですよ。

犬の僕達にも、あなた方ほど発達したものではありませんが、前頭連合野が備わっています。つまり、感情はある訳です。ただ、訓練によって、またそれぞれの努力によって十分な発達がなされていないと、時に本能が感情を置き去りにしてしまいます。

人間にも、そんな方々をよく見かけますよね。主人の佐倉氏など、その典型だったと思われる。彼等の暮らす社会では一人のオスに一人の女性が連れ添うのがルールだそうですが、彼の生存本能、或いは生殖本能というべきでしょうか。とにかく彼のそれはルールに従ってなかつたように見えました。

「俺は直情径行型だから」と、僕に自嘲気味に語ったことも少なくありません。そして今なおこの世に迎え入れてやることの出来なかつた魂に詫び続けておられます。それほど後悔するなら、短絡的に行動を起こす前に塾考すべきでしょうに。何度もその旨を告げたのですが、僕のアドバイスは終ぞ聞き入れられることがありませんでした。

そして、そんな佐倉氏を舌鋒鋭く非難する社会の”自称常識人”が、それぞれのペットには何頭（小型犬は匹と数えるのかも知れない）もの異性との性交を強要するのです。優れた遺伝子を後世に残

そうとするのが目的だといわれますが、僕には納得がいきません。それを金銭で売買しているのですから。

「古来は人類もそうだったんだぞ。もともと、俺の遺伝子が優れているかどうかは分からんがな」と、その件に触れる毎、そういつて佐倉氏は自己弁護をしたものです。彼はこちら側の世界に住むべきオスだったのでしょね。そうすれば多くの非難を浴びることもなく、あまつさえ賞賛さえ得られたに違いないでしょう。そう考えると同情の念を禁じ得ません。

媚びる 人間にとつては良い意味を持たない言葉だそうですが、僕達にとつては極めて重要な意味を持ちます。生存本能に基づいた振舞いであるといつても過言ではないでしょう。

あなた方人間によつて野生を奪われた僕達は、同時に生きるための狩りをする能力を奪われてしまっている。従つてあなた方から与えられる食料が命綱なのです。そのためなら媚びもしましょうよ。尻尾も振るといふ言葉を、あなた方はよく比喻や暗喩に使つておられますね。僕達をそうさせたといふ自覚を持っていただければ幸いです。

躰という大義を振りかざし、いうことを聞かないとあげない。オアズケ、待てなど、様々な方法で、その生存本能を抑制しようとなさいますね。本能を抑制出来なければ、僕達をペット＝家族として受け入れてはあげない、そう言つておられるのでしょうか。

酷い話しを聞いた事があります。猟犬として飼われていた犬が、狩猟シーズン終了と同時に、そのまま山に置き去りにされるそうです。翌年にまた訓練された犬を買う方が安上がりだと言う理由で。

あなた方に捨てられ、努力して本来の野生を取り戻した彼等は、野犬と呼ばれます。そして、そんな事情があつても、危険であるという理由で駆除の対象となつてしまします。二重拘束を押しつけたあなた方の手によつて。

人間のオス諸兄にお訊ねします。眼前に全裸の眉目麗しい女性が居て、おいでおいでをされたらどうなさいますか？ あなた方の本能への訴えです。人目さえなければ倫理観などひとたまりもなく吹き飛んでしまうのではありませんか？ オアズケはその女性との間に分厚いガラスを張られたようなものです。とても、残酷な行為だと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9468x/>

或る犬の生涯

2011年10月28日07時11分発行